

中華聖哲伝統教学綱要

〈朱子白鹿洞書院揭示〉

「父子に親 [しん] あり。君臣に義 [ぎ] あり。夫婦に別 [べつ] あり。長幼に序 [じょ] あり。朋友に信 [しん] あり。」

右は五教の目にて、堯 [ぎょう] 舜 [しゅん]、契 [せつ] をして司徒たらしめ、敬 [つつし] んで五教を敷かしむるは、すなわちこの事なり。学ぶ者これを学ばんのみ。その、これを学ぶの序もまた五あり。

「博くこれを学び、審 [つまび] らかにこれを問い、慎んでこれを思い、明らかにこれを弁じ、篤 [あつ] くこれを行なう。」

学・問・思・弁は、以って理を窮むる所なり。篤くこれを行なう事は、すなわち知に格 [いた] り身を修むるより以って、生活し、工作し、世に処し、物に接するに至るまで、また各々要 [かな] めあり。

「言 [こと] は忠信に、行 (おこな) いは篤敬 [とくけい]。忿 [いか] りを懲 [こ] らし欲を窒 [ふさ] ぎ、善に遷 [うつ] り過 [あやま] ちを改む。」
右の六目は身を修むる要め。

「その誼を正してその利を謀らず。その道を明らかにしてその功を計らず。」
右の四目は世に処する要め。

「己の欲せざるところ人に施すこと勿れ。行いて得ざることあれば、これを己に反りみ求む。」
右の二目は物に接する要め。

聖哲の、人に学を為すを教うるの意は、人をして諸法の実相を覚悟せしめ、義理を深明して以ってその身を修め、然る後に推して以って人に及ぼさしむるにあらざるはなし。

これ即ち、古今東西の聖哲の大学問なり。

浄空は一生をかけて学問を修め、今日多少なりとも成果をあげることができたのは、中華文化の古の聖人や先賢が伝えた伝統教学の要綱のおかげであると言える。今日、この場で同学の皆さんとこの人類の共通の智慧ともいえる財産をともに分かち合えることを願っている。

「人の初め、性 [せい] 本 [もと] 善。性 [せい] 相 [あい] 近し。習い相 [あい] 遠し。苟 [いやし] くも教えずんば、性 [せい] すなわち遷 [うつ] る。教えの道は、専 [もっぱ] らを以って貴 [とうと] ぶ。」

浄空は一生をかけて自らを修め、また人のために説いてきた。そこで、この《三字経》の最初の八句を全体の指導要綱とする。

「人の初め、性本善」は、大乘仏教で仏が説いている「一切衆生、皆仏性有り」と同じ意味である。儒家は「本善」、仏法では「仏性」という。ともに、一切の衆生はみな仏性がある、もともと善であると肯定している。およそ、教育の仕事にたずさわる人は、まず第一に「人の性はもともと善である」と肯定しなければならない。これは尊敬に値することである。

では、「本善」はなぜ、善でなくなるのか。孔子は「性相近し、習い相遠し」と説いた。衆生の本性は同じだが、習性が衆生を変えてしまう。

人はまさに知らず知らず、習性のなかに墮落していく。したがって、聖人や先哲の伝統的な教学に特別なものがあるわけではない。人がその本性を回復させるのを助けるだけである。これが倫理道德の教育であり、人に習性から本性本善に帰るように教え導くことである。

「苟しくも教えずんば、性すなわち遷る」。教えるとは目覚めさせることである。もし人が目覚め、顧みるよう助けなかったら、このように汚染されることは、ますます深刻になってくる。

今日、社会に見られる動乱や災難の根源は、習性の深刻な汚染である。そのため、教え導くことが必要である。では、誰が教え導くのか。聖人であり、賢人である。

古の帝王はすべて、大聖人であり、大賢人であった。堯 [ぎょう]、舜 [しゅん]、禹 [う]、湯王は孔子が最も崇敬していた聖人であり、聖人や賢人になるために学ぶべきよき模範である。中国では教育に関して少なくとも四千五百年以上の歴史があり、中国伝統教学の要綱をしっかりと理解し、生活の中で実践していけば、一人一人がみな、本性本善を取り戻し、一人一人がみな堯になり、舜になることができる。

「教えの道は、専らを以って貴ぶ」。学ぶことで最も重要なのが「専らにする」ことであり、雑になってはいけない。あれこれ修めても、上っつらだけの

知識が学べるだけである。これは智慧ではない。専一して修めることは仏教の戒律と禪定に相応し、そこではじめて智慧を開くことができ、世法と仏法に深く通じるようになる。

仏法の教学の全てに共通する原則は、「戒律によって禪定を得、禪定によって智慧を開く」ということである。これはもろもろの仏が修行を積んで悟りに到達した経験から語られたものである。

〈朱子白鹿洞書院揭示〉

宋代の朱熹〔しゅき〕は儒家では第一の大徳である。朱熹の白鹿洞書院揭示は、文字は多くはないが、中国の堯から舜、禹、湯王、文王、武王、周公、孔子、孟子に至るまで、古の聖人や先賢が受け継ぎ、伝えてきた教えのすべてを要綱に系統づけ、五句でまとめてある。簡にして要、詳細にして分かりやすく、まさに得がたきものである。

「父子に親あり。君臣に義あり。夫婦に別あり。長幼に序あり。朋友に信あり。」

堯と舜はこの五教をもって人民を教化した。五教は上古に始まり、清朝末期まで、中国において四千五百余年にわたり、各時代の中国人みな喜んで遵守し、実践してきた。

中華民国が成立後、五教をおろそかにしたため、現在、社会問題が現われてきた。私たちが常々、ニュースなどで耳にする夫婦や親子、兄弟が互いに残虐に殺しあうようなことは、以前は発生しなかった。

家庭において第一に大事なことは生活（物質生活と精神生活）であり、第二が子々孫々継承していくことである。すなわち、家庭教育であり、子女を教え導くことである。「国を建て、民を治めるには、教学が先立つ」。国家の政治も大教えの一つであり、地方の公務にたずさわる者は人々をよく教え導かなければならない。

それゆえ、中国では古くから教育を常に重視してきた。何を教えたのであろうか。倫理道徳を教え、五倫を教えたのである。すなわち、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友である。五倫は「道」である。「道」は自然の法則であり、誰かが作り出したり、発明したりしたものではなく、自然のままにあるものである。親・義・別・序・信は「徳」である。大自然の法則に従うことを「徳」と称する。自然に背くことはできず、自然に背けば必ずや面倒が起きる。

「人の初め、性本善」。私たちはそれを学友の赤子から知り得る。四カ月目を迎えたばかりの赤子は非常に健康で、人を見るとニコニコと笑いかける。このとき、この赤子は汚れに染まっておらず、そのもとの性は善である。だんだんと成長し何カ月かたつと、赤子は分別も出て、執着するようになり、徐々に外の環境に汚染されていく。

そのため、儒家の教育は胎教から始まる。母親が懐妊したときから始める。懐妊したとき、考えや言葉遣いもすべて正しくなければならない。胎児に影響を与えるからである。

子どもが生まれた後、父母たる者、年長者たる者は、子どもの前で一挙手一投足にも礼を守らなければならない。なぜであろうか。子どもが見て、聞いて、それを見習うからである。一切の不善はすべて子どもに見せてはいけない、聞かせてはいけない。小さいときからまったく清らかで、純一な善をもつ本性を培い、汚れに染まることを防ぐ。これが神聖なる愛の教育である。

五教の最初は「父子に親あり」である。「親」とは親しみ愛することである。すなわち、父母によく仕えることを教える。これは完全に自然の関係である。教育の目標は父子の間の親しみ愛する関係を終生保ち続け、ひいては父母の葬祭を丁重に行ない、祖先の霊を祭ることまで望むものである。これができ得るものは教育以外にはない。

「君臣に義あり」の「義」は道義を指し、忠義を教えるということである。「君」は指導者、「臣」は指導をうける者である。指導するのと指導を受ける関係が道義である。具体的に言うと、君の仁、臣の忠とは、指導者は仁慈をもって部下に対し、指導を受ける者は忠義と誠実をもって指導者のために力を尽くさなければならない。私たちが人のために事を行なうときは、誠意と力を尽くし、事を見事に全うしなければならない。これが忠義を尽くすということである。これが指導者と指導を受ける者との関係である。

第三の「夫婦に別あり」の「別」とは何か。これは、夫婦にはそれぞれ異なる任務があり、区別が必要であるということである。夫婦が一つの家庭を作る。家庭には大きな任務が二つある。第一が家族を養い生活することである。外に出て金を稼ぎ、一家の者が物質的、精神的生活で一定の水準に達するようにする。第二は、昔の中国人がよく口にした「不孝には三つあり、その中でも子のないのが最大」である。重要なことは次の世代を教育することである。これが家庭教育である。昔は、一家の生活は主人が担い、仕事に奮闘してやっとな家族

を養うことができた。女性は家庭で、夫を助け、子どもを教え、導く。これが天職であった。子どもをよく教え導いたか否かは、すべて母親の責任であった。

現代社会は男女平等なので、二大任務は同じように神聖であり、上下や尊卑は決してなく、平等である。二人のうち、一人は家族を養う責任を負い、もう一人は次の世代を教育する責任を負う。もし、奥さんが外で働いて家計を支えるならば、ご主人が家で子どもたちを教え導かなければならない。もし、ご主人が外で働けば、奥さんが家で子どもたちを教え導かなければならない。そうでなく、二人がともに働きに出れば、子どもたちを教え導く人がおらず、この家庭は次の世代がいなくなってしまう。

現在、多くの父親や母親は仕事で忙しく、子どもたちとは一週間に一度、顔を合わせるのも難しい。では、親子の情愛はどのようにしたら築けるのか。両親に仕事があるので、子どもたちをお手伝いさんに見てもらえば、そのお手伝いさんが子どもたちの父親になり、母親になってしまう。しかし、お手伝いさんは子どもの食事や日常生活の面倒をみるだけであり、その他は何も知らないのどうやって教え導くのか。

もっとも現在は、お手伝いさんの多くは子どもたちにテレビを見させ、インターネットのゲームで遊ばせている。しかし、その内容は殺人や窃盗、不倫、妄言、暴力、色情である。小さいときにこれに慣れ、成長してからは、思うがままに自分の好きなように行動し、少しも恩義を感じる事が出来ない。あなたを好きなときには好くし、好きでなくなったら、傷つけもする。両親でさえも殺す。ましてや他人ならば！ このようなことが社会の風潮になってしまうと、この世界は大変なことになる。

だから、西洋の多くの宗教は終末の日を説いている。私は今のような状況が終末の日だと思う。終末の日是世界が壊滅する。実はこの地球が壊滅するのではなく、世界の倫理道徳が壊滅するのである。聖人や賢人が伝えた教育が壊滅するのである。このような社会現象がすなわち、終末の日を示している。人と人の中には情愛がなく、慈愛もない。ただ、利害のみがあり、対立と矛盾がある。これは本当に恐ろしいことである。

「長幼に序あり」は兄弟の間の関係をいう。「長幼」は兄弟のことである。この「序あり」は自然の、誕生の後先の順序のことで、たとえ双子でも順序があり、尊重しなければならない。だから、年少者は年長者を尊敬することを知り、年長者は年少者をいたわることを知らなくてはならない。兄は弟にやさしく、弟は兄に恭しい態度で接する。

したがって、「序あり」は重要なことである。この道理を遵守しさえすれば、家庭の伝統は破壊されることはなく、家庭円満になれば何事も順調にいく。家庭円満と社会の安定は世界平和の根本である。

「朋友に信あり」。中国では古くから、世界全体はあまねく兄弟であると言われている。朋友は五倫の一つであり、友人の関係は平凡なものではない。道義をもとにした交わりであり、生死、艱難を共にし、互いに助け合う、一つの生命共同体であることを示している。これが友人としての信義である。この一句は人とすべての人との自然な関係を総括したものであり、人と人との関係を明らかにしている。人々は自然に互いを受け入れ、尊敬と信頼の念を抱き、思いやり、そして互いに助け合う。決して、互いに相手を害するなどという理はない。

五教の学習にもそれぞれ五つの順序がある。

「博くこれを学び、審らかにこれを問い、慎んでこれを思い、明らかにこれを弁じ、篤くこれを行なう。」

儒家の教学では、「小学」関連の書籍を六、七歳から学び始める。このとき、生徒に博く学ばせてはならない。専一にすることを貴び、徳行と根本智を成就させることにある。博学は徳行と根本智を破壊し、将来は世間智がさとなり、成就に限りがある。したがって、小学の教育は深く長く心にしみ入るように習わせる課程である。太学（漢の武帝が開設した当時の最高学府）に至って初めて博く学ばせ、多くを聴くように導く。これは修学の第二段階であって、第一段階ではない。

仏陀の教育もまたこの通りである。いつになったら博く学ばせ、多くを聴かせるのか。その前にまず根本智を成就させなければならない。博く学び、多くを聴くは後得智 [ごとくち] である。したがって、深く長く心にしみ入るように習うのは自己の根本智を成就させる課程であり、根本智があつて、その後に始めて後得智があるのである。

根本智があつて、しかる後に博く学び、審らかに問い、慎んで思い、明らかに弁じて一気に完成する。そうして、根境（感覚器官とその対象）が接触するときには三慧（教えを聴いて生じる聞慧、理を思惟して生ずる思慧、禪定を修して生ずる修慧の三つの智慧）を明らかに示す能力があり、後得智（知らざるところなし）を成就する。

修身の要め

「言は忠信に、行いは篤敬。忿りを懲らし欲を窒ぎ、善に遷り過ちを改む。」

孔子の教学は、言葉を非常に重視した。いいかげんに話をしてはいけない、口は災いの元である。ほめたたえるのみで、誹謗はしない。心にまごころがあり、批評をしない。一切の災難や過ちはすべて、善意のない批評、二枚舌、妄言、ざれごと、悪口から生れた結果である。

「行いは篤敬」。「行い」とは行為をいう。聖人や先哲は、いかなる時、いかなる所でも諸仏を礼をもって敬い、すべての人、事がら、物に対して平等な立場で恭しく慎んで相對することを学ばなければならないと、教え導く。「篤」とは、人には誠実であり、慎み深く、つくろわず、内心から発した真の誠をもって恭しく相對する。

「忿りを懲らし欲を窒ぐ」。「忿り」は憤怒であり、瞋恚 [しんい] (怒り) は断たなければならない。「欲」は食欲のこと。食欲は断たなければならない。仏教徒のいう「煩惱無尽誓願断」(一切の煩惱を断とうと誓う)と同じである。こうしてこそ、始めて徳行を成就し本性本善を取り戻すことができる。

処世の要め

「その誼を正してその利を謀らず。その道を明らかにしてその功を計らず。」

「誼」はなすべきかなさざるべきかの意。私たちは良し悪しを判別することを知らねばならない。人に対し、事がらに対し、やるべきか否か。事を行なうときには自己の利害を念頭に入れてはいけない。なぜであろうか。自分に不利ならばしない、自分に有利ならばする。これは私利私欲というものである。すべてのことは社会の人々の利益を前提として、広範で長きにわたり、衆生の有益のために思考しなければならない。

「その道を明らかにしてその功を計らず」。私たちが身を処したり、事に処したりするとき、道義を基準にしなければならない。個人の利害や功罪を基準にしてはならない。こうしてこそ、悪を断ち、善を修め、功德を積み、自己を聖人や先哲の境地にまで高めることができるのである。

物に接する道

「己の欲せざるところ人に施すこと勿れ。行いて得ざることあれば、これを己に反りみ求む。」

「物に接する」とは人や物が互いに接触する一切をいう。それには、自然環境、天地鬼神をも含み、その範囲は非常に広い。私たちが他の人々とお付き合いするときは、「己の欲せざるところ、人に施すこと勿れ」という道理を知っていなければならない。私たちが他者からしてほしいくないことは、他者に行なってはならない。例えば、他の人が私を誹謗するのを望まないならば、私が他の人を誹謗してはいけない。他の人が悪意をもって私を批評するのを望まないなら、私も他の人を悪意をもって批評してはならない。心中での考え、言葉遣いでもまずこのように考えなければならない。こう考えるべきかどうか、このような話は言うべきかどうか、このようなことはすべきかどうかなどと考えなければならない。これが古今の聖人賢人の人に対する、物に接するすべてに共通する原則であり、まさに学ぶべきことである。

「行いて得ざる」とは、例えば、私たちが善意で他の人のために良いことを行なったが、それによって得た報いは反対のものであり、さらに災難に見舞われた。これは誰の過ちか。それは他の人の過ちではなく、自分の過ちである。

「これを己に反りみ求む」はすなわち、自らに反省させることで、別の人のせいにしてはいけないということである。他の人に過ちはなく、過ちは自分のほうにある。この一生に過ちがなくても、前世に過ちがあった。因果は三世と説かれている。「前世の因を知ろうとすれば、今生で受けたものを見よ。来世の果を知ろうとするなら、今生でなしたものを見よ」。私が今日良いことを行なったのに、なぜ報いは好くないのか。落胆する必要はない。この好くない報いは自らの過去世の業障を今、消しているのである。事実の真相を知れば、私たちは心も収まり、天を恨んだり、人をとがめたりすることもなくなり、誤解や対立、争いなどの悪業を造らなくなるだろう。

私は、第三回国際平和会議に出席したことがある。この半世紀、国連は幾度となく世界平和会議を召集したが、世界はなぜ、平和にならないのだろうか。

「これを己に反りみ求む」のとおり、私たちの考え方が間違っているのである。では、間違いはどこにあるのか。例えば、「私は正しい。あなたたちは間違っている」という考えは衝突をもたらし、それを解消するものではない。このような考えを改めて、「あなたは正しい。私が間違っている」と言うべきである。誰もが「あなたは正しい。私が間違っている」と言えば、天下は太平になり、問題は解決する。私は特に語気を強めて、「他の人が間違っているでもこれは正しい。私が正しくてもこれは間違っている」と言う。皆さんはこれを聞いて非常にいぶかしく思い、そのようなことはなし得ないと考える。しかし、私は、

出来なくてもやらなければならないと言う。真に行うことができれば、私たちはこの一生で一切の衝突を解消し、世界平和を促進させて、真の貢献を果たす。平和は自分の心の中で、人や事物に対する対立と行為を解き去ることから始まる。

「聖哲の、人に学を為すを教うるの意は、人をして諸法の実相を覚悟せしめ、義理を深明して以ってその身を修め、然る後に推して以って人に及ぼさしむるにあらざるはなし。」

聖人や賢人がこの世に現われて、民衆を教え導くのは、民衆が宇宙の万事万物の真相を究明し、人生の意義と価値を理解し、さらに進んで、人としていかに身を処すか、事をいかに行なうかを知り、他者および自己のために利益をはかるのを助けんがためである。自ら徳を増進させ、修行するのは、完全に衆生の模範となるためであり、人々が喜びとともにこれを学んでほしいからである。聖人や賢人は自らが先に行なってから、口にする。自らができないなら、口にしてはいけない。何を言っても他の人は信じない。自らが成し遂げてから、はじめて己を推して人に及ぼすことができるのである。

「これ即ち、古今東西の聖哲の大学問なり。」

これが中国の古の聖人や先賢が伝えてきた伝統教学に共通の要綱である。中国では、四千五百年以上推し進めてきた。中国人はみなこれを信じ、従い、守ってきた。だからこそ、中国は世界の中で高くそびえ立つことができる。もし、イスラム教徒が『コーラン』の教えを遵守できるのなら、キリスト教徒が『聖書』の教えを遵守できるのなら、仏教徒が教えに従って、お釈迦様の教えの通りに実践できるのなら、中国人は伝統教学の要綱を引き続き遵守することができる。古の聖人や先賢、代々の先師、神聖な教学を忘れることなく、毎日読誦して学べば、国際間、部族間、宗教間の一切の対立、矛盾、誤解は自然に解消する。世界の国々と民族は復興し、しかも速やかに復興し、世界に真の平和と安定した社会をもたらすことができるのである。